



世界へのプレゼントになろう

RI 会長テーマ

2015~2016 年度
大船渡西ロータリークラブ会報

七福人

会 長 松岡 克之

副会長 水野 賢一

幹 事 新沼 敏宏



会長テーマ

誇りをもって 行動を

．．． 例 会 記 録 ．．．

5月第3週例会 2016年 5月19日(木)

ソング : それでこそロータリー ボックス : 31,000円(報告者 山口ひとみ 会員)

お客様紹介 : 仙台レインボロータリークラブ 山下美実様 本日の講師 大船渡市職員 平野桃子様

本日出席率 : 63.64% 前回修正後92.73%(メキャップ20名) (報告者 大西 竜介 会員)



山下様ようこそお出で下さいました。



5月のハッピーバースデー



7日生まれ 戸田公明会員 (出席免除会員)



橋爪文人会員

5日生まれ



新沼敏宏会員

30日生まれ



木下彰則会員

31日生まれ



阿部英氣会員

31日生まれ

★ 会長の時間 松岡克之会長



皆様こんにちは。

先週の14日の土曜日に宮古へ行って来ました。

宮古東RCの創立50周年記念式典へ、濱守ガバナーエレクト、水野副会長、新沼幹事と4人で出席してきました。

式典前に記念講演があり「メタボリック症候群」について住友病院長、松澤佑次様のお話を聞きました。メタボは動脈硬化を引き起こす内臓脂肪の量と言われており、内臓脂肪を減らすためには「一に運動、二に食事」とお話しされ、特に運動が大事とのことでした。

本会議には200人近い会員の方々が出席し、宮古市長である山本正徳様を初め花坂商工会議所会頭、2520地区ガバナー菅原裕典様、そして濱守エレクトのそれぞれの挨拶があり聞いてきました。

式典は「森が水を生む、山美しければ川美しく、川美しければ海美し」をテーマに水の保全の為に植林運動を紹介していました。

話は変わりますが、今週月曜日に大阪北RC様からの移動用散水機の贈呈式に出席するため大船渡市役所へ行って来ました。大阪北RCより鴻池一季(かずすえ)様がお見えになり戸田大船渡市長に贈呈して頂きました。鴻池様は建設業界大手の鴻池組の会長職に就いておられ素晴らしい紳士でした。

市長は感謝の言葉と大船渡市の復興状況をお話しされていました。

移動散水機はグラウンドの砂や埃等のまいあがり防止のための水まき機で、赤崎小学校、中学校と越喜来中学校の3校に頂きました。

大阪北RC様からは五回の被災地支援をして頂き、被災場の住民としては大変ありがたく心に残る援助です。

今日は平野桃子様の講話です。出席者全員で拝聴したいと思いますので平野様宜しく申し上げます。

◆◆◆ 幹事報告 ◆◆◆

- 1 西宮恵美寿 RC より 甲子園観戦プロジェクトの DVD が届いています。
同封の手紙には布田先生はじめ参加中学生全員から礼状を頂き、このプロジェクトに参加したことにより大いに発奮している様子が嬉しいと書いてあります。
- 2 ガバナー事務所より
イ 2016年規定審議会報告会の案内が届いています。
日時 6月11日(土) 10時~11時30分 場所 エポカ21 締切り 6月3日
ロ 国際大会分科会の案内が届いています。詳細はクラブ事務局へ
- 3 米山記念奨学会より 「ハイライトよねやま」が届いています。
今月のトピックス： 熊本地震に義援金やカレーの炊き出し等学友からの支援続々・・・
- 4 宮古東 RC より 創立50周年記念式典出席に対する礼状が届いています。

◆◆◆ 委員会報告 ◆◆◆

★ 木下彰則親睦委員長

春?のゴルフコンペを6月15日に予定しております。 後日 FAX にてご案内いたしますのでご参加
お願い致します。

◆◆◆ 本日のプログラム ◆◆◆

青少年奉仕アワー : 大船渡市 平野桃子様講話



大船渡西ロータリークラブのみなさま、こんにちは。盛町在住の、平野桃子と申します。
みでのとおり、なんの変哲もない20代、後半の女性です。

私は現在大船渡市に勤めています。平野です、というと十中八九、お客さんから「まっさきだべ」と言われますが、まっさき町出身ではありません。私は生まれも育ちも福岡県古賀市です。そうすると、「ああ、支援の人だね。どうもね。」とも言われますが、支援できている派遣職員でもありません。私は大船渡市で働き始めて今年で5年目、そして大船渡に住み始めて今年で5年目の、正真正銘の大船渡市民であり、大船渡市の職員です。そうこたえと、「なんでまた九州の人が大船渡に?嫁にきたのか?」ともきかれますが、残念ながら嫁に来たわけでもありません。今日は九州出身の私がなぜ今ここにいるのか、その辺りの話をさせていただこうと思います。

ということでまずたいしたことはない私の生い立ちについてお話します。生まれは福岡県古賀市です。兄弟は姉と兄がいます、私は末っ子です。高校までを家族と一緒に福岡県古賀市で過ごし、大学進学を機に京都で一人暮らしを始めました。奨学金をもらいつつ、親の援助受けつつ、ごはん屋さんでアルバイトをしつつ、大学に通っていました。どこにでもいる普通の大学生です。やりたい仕事とか、なにか特別な目標みたいなもの

があったわけでもないけど、卒業したら九州に帰りたいなあとは漠然とっていました。

そんな私が大学3年生だった時の、3月11日。部屋でテレビを見ていたら画面がパッと変わって。津波の映像が映し出されました。京都は揺れなかったの、その画面を観て初めて東北地方を震源とする地震があったこと、それに伴って津波が発生したということをしりました。その時点で、宮城岩手出身あるいは在住の親戚も友人もいなかったの、具体的に心配する相手はいませんでした。ただただテレビをみて、なぜだか勝手に涙が落ちていました。しばらくして、今辛い人がある、苦しい人がある、なにかしなきゃ！そんな気持ちが湧いてきました。でも現地に行ける伝手もなく、あてもなく、行く勇気も覚悟もなかったの、日々テレビやインターネットの情報をみてはそわそわするだけでした。具体的にできたことと言えば、インターネットで見つけた、支援物資の募集をしている茨城県の自治体にいくらか物資を送ったくらいです。

それから数カ月たって、震災関連以外のテレビ番組も始まるようになって、何かが落ち着きを取り戻し始めたように見えたとき、他大学に通う高校時代の友人が、大学のゼミ活動の一環で、被災地で開催されるまつりの手伝いをしに行くんだが一緒にどうか、という話を持ちかけてくれて。一度現地に行って事実をみておきたいと思っていたので、二つ返事で、連れて行ってもらうことにしました。

その「被災地」というのが大船渡市で、「おまつり」というのが盛町の七夕まつり、でした。私はこの高校時代の友人との会話で、初めて、大船渡市という町をしりました。

そうして、私は平成23年の8月1日あたりに初めて大船渡市に足を踏み入れました。滞在期間はおよそ一週間、寝泊まりは盛の商店街にある呉服屋さん、「まるよさん」でさせていただきました。大船渡にいた一週間でしたことは、9割方まつりの設営準備、山車制作手伝いで、のこり1割くらいの時間で被災地を実際にみた、というかんじでした。側溝のどろあげとか、そういった作業は一切していません。ただひたすらまつりの準備を町の大人と、こどもと、一緒にやって、一緒に時間をすごしただけです。特別なことはなにもしていないのですが、そのなかで、気づきがありました。大船渡に実際に来てみて初めて、「ここに人の生活がある」ということを知りました。テレビで避難所の様子は映ったし、被災地の状況はなんとなくはできたのですが、それともやはりちがう。「この人が生まれ育った町が流されたんだ」とか、「この子が通う学校に仮設住宅があるんだ」とか、人と情報がリンクして初めて、自分にとって震災というものが鮮明に映り始めたきがしました。大船渡にはじめてきた大学4年生の8月に、ここは「被災地」ではなく誰かにとって「唯一無二の帰るべき場所」なんだと気づきました。自分の故郷がおなじことになったら、自分の身におなじことがふりかかったらどんなにか心が痛いことかと、痛切に感じました。

そうした気づきがあって、お祭りを終えて、京都に戻りました。京都に戻ってから、今回気づいたことをなかつたことにしないために今後自分に何が出来るのだろうかと考えました。結論は、なかつたことにしてしまうだろう、でした。正直、なにかできるとは思えなかつたです。力になれることなんてないと思いました。ましてや今から就職して福岡に帰ったら、日常に忙殺されてしまってもう一生ここには来ないだろうとも思いました。そうして忘れて、なかつたことになるんだろうなど。でも、それってどうなんだ、と。当時の私は強く疑問に思いまして。大船渡を帰る場所とする人がいることを知ったのに、またがんばろうとしているひとがいると知ったのに、何もしないって。それって何も知らないのと同じじゃないかと思って。こんだけ大きな自然災害に、ここにいる人だけで立ち向かわなきゃいけないなんて、ものすごく心細いようなきがして。自分になにかできるとは思わなかつたけど、私は被災者でもなんでもありませんし、震災後の大船渡しか知らないですし、ここを故郷とする人と同じ想いに立つことは一生できないけど、でもできるだけ近くで、一緒にこの町を見守りたいなと思って。大船渡に住んでみよう、そのためにはまず仕事しなければ、と思って今の職場の試験を受けました。ただ、もちろん福岡に帰りたい気持ちもあったので、地元近辺の自治体の採用試験も受験してました。

余談ですが、私が最初に大船渡に来た時大学4年生で、その時点で就職についてどう考えていたかといえば、警察官になろうと、思っていました。福岡県警の採用試験を受けていたんです。で、大船渡に滞在している期間中に、最終試験の結果が出て、不合格だったんです。それで、福岡に帰るという選択肢に、大船渡に行く

いう選択肢を自分の中で追加しました。

そうして試験をうけた結果、大船渡と、福岡と、どちらも合格して。いよいよどうしようか、となった時に。自分にしかできない選択をしようと思い、大船渡に来ることを選びました。まず大船渡で仕事して、それからあとで福岡に帰ることはあっても逆はないだろう、とも考えました。自分をとおして、一人でも多くの人に誰かが暮らす大船渡を知ってほしいという気持ちもありました。また、よそ者の私を採用した方にも何かしらの意図や想いはあるはずで、それに応えたいという思いもありました。被災した地域の現実を自分が外に運び出して別の場で生かさなきゃ、という気持ちもありました。震災後だからこそいろんな人が街に集まっていて、そういう知識や気力の集合体に触れてみたい気持ちもありました。ここで動けなければきっと後悔するだろう、という思いもありました。

大事な家族が福岡にいて、心配掛けたくないとか、近くで力になりたいとか、そういう気持ちももちろんありました。友達も地元にいるし、地元に戻ることも一つの幸せな選択だと思いました。いちばんあたたかい空間はそこにあるという確信は今でもあります。みなさんそうでしょうけど、私だって生まれ育った町が一番好きなんです。自分の家族も、帰っておいでと、帰ってきてほしいと、言ってくれました。でも、私の大好きで尊敬する家族や友達が作ってくれた私は、ここで家に帰るような人間ではないと、思いました。かすかに手に届いている他人事から、自ら手を放す自分ではないと思いました。自分に誇りを持てる行動ってなんだろう、家族が誇りに思ってくれる行動ってなんだろう、そういったことを考えて。

そうしてわたしは、大船渡に住むことを選びました。

もちろん両親兄弟からはものすごく反対されました。親、というか姉にもものすごく怒られました。でも、これまでみなさんにお伝えしたような話をして、今行けないと私じゃないんだ、と行って、なんとかかんとか説得して。やっとなのおもいで、家族からの「行ってらっしゃい」という言葉を引き出しました。

そうして家族からも背中を推してもらって、平成 24 年の春に、改めて大船渡に来て、訳も分からないなか仕事を始めて、いま 5 回目の春を迎えている、というところです。

社会人 5 年目、知らないことばかりで日々反省するばかりですが、少しずつ変わるこの町を、みなさんと一緒によりよい場所に、より暖かな空間にしていけたらなと思います。

私は地の人間ではありませんが、よそ者なりにこの町のこれからを応援しています。ここで生まれ育つ子どもたちが、この町を誇りに思ってくれるように、次の世代によりバトンを繋げるように、今できることに向き合っていきたいなと思っています。ここ大船渡を想うひとの中には、私みたいなものいるんだなあということを知っていただいて、ここにはそういう、人を引き付ける力があるということを再度気づいていただいて、さらに郷土愛を深めていただければなあと思います。

本日の私からの話は以上です。ありがとうございました。